

## 毎日が祝日

山下壮起

奨励者紹介〔やました・そうき〕

日本キリスト教団阿倍野教会牧師

さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、見つからなかったため、捜しながらエルサレムに引き返した。三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人々に愛された。

(ルカによる福音書 2章41—52節)

### フレデリック・ダグラス

#### と Tahir

先週の木曜日は何の日だったかご存知でしょうか。先週の木曜日、7月4日はアメリカ合衆国の独立記念日でした。アメリカでは、独立記念日は、昼間は多くの人と一緒に集まってバーベキューをして、夜になると花火が打ち上げられ、盛大にお祝いされる祝日です。しかし、一方で、昔からこの独立記念日に対して疑問を投げかける声があります。

奴隷制時代を生きたアフリカ系アメリカ人のフレデリック・ダグラスという人がいます。彼は南部の奴隷農園から脱出して、黒人の自由が認められた北部に逃げて奴隷制廃止運動に身を投じます。そんなダグラスは1852年7月5日に行った演説の中でこんなことを語っています。

「この七月四日は皆様のものですが、私のものではありません。皆様が歓喜するとき、私は嘆いています。(中略)国家的な喜びの声の喧騒のかなたに、何百万人の、深い嘆きの声を私は聞きます!(中略)今日のこの特別の日に、神と、押し潰され血を流す奴隷とともに立ちながら、踏みにじられた人々の名のもとに、足枷をはめられた自由の名のもとに、無視され踏みつけられた憲法と聖書の名のもとに、強調してもしすぎることはない奴隷制度—アメリカの大罪、アメリカの恥—を恒久化するすべてを問いただし、弾劾します」(荒このみ編訳『アメリカの黒人演説集 キング・マルコムX・モリスン他』岩波書店 2008年)。

これは「奴隷にとって七月四日とは何か?」と題された演説です。そして、ダグラスは奴隷制が存在する中

で7月4日のアメリカ独立記念日を祝うことの欺瞞性を問うています。この演説から150年後の2001年、ダグラスの演説に似たような言葉を Tahir というアフリカ系アメリカ人のラッパーが Holiday Pay という曲の中で次のような内容でラップしています(1)。

「7月4日は俺の独立記念日なんかじゃない。アメリカが独立した1776年の7月4日には、まだ黒人は奴隷で、自由と呼ばれるものを追っかけてた。でもな、未だにこの国では、俺たちは見えない鎖につながれてる」と、アメリカの歴史への視点や制度がいかに差別的であるかを訴えています。

実は、この Holiday Pay という曲は、アメリカ合衆国の1年の祝日を挙げていきながら、その祝日がアフリカ系アメリカ人にとってどんな意味を持っているのかを皮肉をこめてラップするという曲です。そして、その冒頭の歌詞はこのような内容です。

「ハッピー・ニュー・イヤー？馬鹿なこと言うんじゃない。何にも新しいことなんてない。毎年、警察が同じようにやって来て、俺の仲間を無実の罪で逮捕しようとする」。この歌詞は、アフリカ系アメリカ人の若者が人種差別による偏見に基づいて不当に逮捕される現実が新しい年になっても変わらないままであることを皮肉るものです。

この曲のタイトルにもある Holiday は祝日を意味しますが、その語源は Holy Day、つまり、「聖なる日」です。国の祝日というのは、その国の歴史において特別な意味を持つ日だということです。しかし、Holiday Pay という曲が示すのは、その特別な意味を持つ日が、一方では誰かを排除するものであったり、誰かの苦しみを踏みにじり、見えなくさせたりするものであるということです。

ダグラスや Tahir の言葉から、祝日、国にとっての「聖なる日」というのは、国の中で力を持つ者によって定められ、その力を維持するために用いられてきた側面があるのではないかと思います。そして、「独立記念日が黒人にとって意味するもの」を日本に置き換えればどうなるでしょうか。

日本の「建国記念の日」は2月11日と定められていますが、これは明治政府が定めた「紀元節」を1966年に復活させたものです。紀元節とは、神話に記される神武天皇が初代天皇として即位したとされる日に基づいて定めたものです。つまり、明治政府は実在したかわからない伝説上の人物の即位した日を建国の最初とすることで、天皇を中心とした国造りを進めようとしたわけです。

その後、明治時代から戦前にかけて、2月11日になると、毎年各地の神社で「紀元節祭」が催され、国家神道に基づく体制が造られていきました。そのような国家の在り方の中で、戦時中には多くのキリスト者が弾圧されることとなりましたし、日本が侵略したアジア諸国の人びとに天皇を崇拜することが強制されました。

つまり、日本の祝日である「建国記念の日」にも、人びとが弾圧された歴史が隠されているということです。

## 神殿で

### イエスを見失う両親

さて、先ほど読んでいただいた聖書箇所は、イスラエルにとっての祝日、聖なる日である過越祭での出来事が記されています。過越祭とはユダヤ教の三大祭りの一つで、1週間も盛大なお祝いが続きます。イエス様の両親、つまり、マリアとヨセフも、毎年過越祭の時にはエルサレムへ旅し、巡礼をしていました。また、聖書の記述から、他の親戚や友人家族らと一緒に巡礼していたことがうかがえます。

その巡礼の途中で、マリアとヨセフがイエス様を見失ってしまいます。イエス様はこの時、12歳になっていた

と42節に記されているので、ユダヤ人の慣習の中では成人とされていました。つまり、イエス様の弟や妹を見ているので精一杯だったマリアとヨセフは、イエス様を大人扱いして自由に行動させ、他の親戚と一緒に行動していると考えたのかもしれませんが。

そして、イエス様がいないと気づいた時には、祭りが終わってナザレの村に帰る旅路についてから1日分の道のりを行ってしまいました。一緒にエルサレムに巡礼した親戚や知人の家族の中にもイエス様がいなくて、マリアとヨセフはイエス様を探しながら3日間かけてエルサレムへと引き返しました。

エルサレムに到着すると、マリアとヨセフはイエス様を神殿の中に見つけました。イエス様は、神殿の中で学者たちの真ん中に座って、話を聞いたり、質問したりしているところでした。そんなイエス様を見つけて、母マリアは「お父さんもわたしも心配して捜していたのです」と、イエス様を叱ります。

それに対して、イエス様は「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」と答えます。この言葉に今日の聖書箇所メッセージが示されていると思います。

## 日常に戻ろうとする中

### で見失われる神

マリアとヨセフがイエス様を見失ったのは、「祭りの期間が終わって帰路についたとき」だったと記されています。つまり、お祭りという聖なる時間を終えて、日常に帰っていかうとする時に、マリアとヨセフはイエス様を見失ったということです。

一方で、マリアに叱られたイエス様は「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だ」と答えています。新共同訳聖書では「父の家」と訳されていますが、元々聖書が書かれていたギリシャ語では、ただ「父のもの」としか書かれていません。

つまり、イエス様は自分がいつも「父」つまり、神様のものの中、神様の出来事の中にいるのは当然であると答えているわけです。それは、イエス様は祭りが終わったあとの日常をも神様のものと捉えているということなのだと思います。

聖なる日とされる祝日の期間ではない日常も神様の出来事だということです。一方で、マリアとヨセフは、祭りの期間を終えて、日常の中に帰っていかうとする時に、イエス様を見失ってしまいました。その姿は、特別な時ではない日常の中において、神様を見失ってしまうことを表しているのかもしれませんが。

そのことは、42節にある「祭りの慣習」という言葉によっても逆説的に示されていると思います。「慣習」とは「慣れた習わし」つまり、長年の習わしによって制度化されたものということです。一方でそれは、元々の意味が忘れられて形骸化しかねないものということを暗示しています。

そのことは、イエス様が十字架に架けられる直前に、神殿の境内で商売をしていた人びとを追い出した出来事に通じます。それは、今日の聖書箇所と同じく、過越祭の時のことでした。

イエス様は神殿で商売する人や両替商に向かって、「あなたたちが神殿を強盗の巣にしている」と厳しく批判しました。神殿では外から持ってきた「いけにえ」の動物を傷物扱いして、神殿で売られる動物を購入させたり、神殿で用いる特別な貨幣への両替のために法外な手数料を取ったりして、商人たちは莫大な利益を得ていたからです。

商人たちと癒着した神殿が礼拝に来た人びとからもあの手この手を使って搾取している在り方をイエス様は告発したということです。そして、その告発は、祭りの期間に神殿の宗教的権威を利用して庶民から大金が貪られ、庶民の厳しい現実が忘れ去られるという現実、聖なる日の形骸化を浮き彫りにするものです。

一方で、ヨハネによる福音書5章には、エルサレムの祭りに行ったイエス様が神殿のすぐそばにあった「ベトザタ」と呼ばれる池にあった回廊を訪れた時のことが描かれています。そこには、病気や体の障害を理由に社会から捨て置かれた人びとが大勢横たわっていました。

祭りの喧騒の裏で、社会から見捨てられてしまった病人の人びとのところにイエス様はいたということです。イエス様は楽しい祭りではなく、そこから忘れ去られた場所に出向き、足を止められました。祭りを楽しむこと自体が悪いということではありません。イエス様自身、祭りに参加するためにエルサレムに行っているからです。

ただ、祭りの時、聖なる日の本質が忘れ去られる中で、祭りに加わることができず、排除され、見捨てられた悲しみの中にある人びとがいる。そのような人びとの命にどう向かい、いかに回復するのか。そのことをイエス様の姿は、問いかけているのだと思います。

誰もが楽しく喜びを分かち合う時であるはずのお祭りの時であるからこそ、あってはならない状況に置かれた人を見て、イエス様はそんな祭りの在り方、聖なる日の在り方を否定しました。

### 神は日常の中にいる

マリアとヨセフがイエス様を見失った出来事を、今お話ししたイエス様の姿と合わせて考えるなら、聖なる日、祝日だけが特別な日ではない、聖なる場所とされる神殿や教会だけが特別な場所ではないといえるかもしれません。神様は日常の中、私たち一人ひとりの日々の現実の中にこそ共にいるということです。今日という日がどんな日であっても、神様が共にいてくれるという祝福があることを考えるなら、毎日が祝日、祝福された日です。

今年は天皇の代替わりが行われ、新天皇即位の日は政府によって祝日とされました。そして、時代が平成から令和に変わったということをいろいろなところで耳にします。しかし、天皇が代替わりし、元号が変わったことで、私たちの現実が変わったわけでは決してありません。

むしろ、「新しい時代」という言葉によって、今この社会で弱い立場を押し付けられている人びとのことが隠蔽されたのではないかと思います。天皇の代替わりによって生じた10連休によって学校が休みになり、給食を食べることができない貧困家庭の子どもたちや、年金だけでは生活できずにアルバイトをしなければならぬ高齢者にとって、そんな「新しい時代」は悪夢だったのではないのでしょうか。しかし、そのような状況にある人びとと神様は共におられると、イエス様は教えてくれました。

聖書は「新しくされる」ことを伝えていますが、それは国が定めた特別な出来事や特別な「偉い人」とされる誰かによって起こるものではありません。日常の中に起こる出来事をしっかりと見つめる中で神様との出会いを求めていくことによって、私たちは新しくされていくということです。

そして、その神様とは神殿、あるいは教会という特定の場所で、特定の行為によってしか出会えないということではありません。イエス様はさまざまな人の日常の中を共に歩まれたからです。

日常の中でさまざまな出来事が起こります。そこに生きることへの神様からの問いかけが見える瞬間を大

切にしてほしいと思います。いろいろなことが詰まっている皆さんお一人おひとりの日常の中で、神様と出会いながら、今日も生きているという祝福を受け止めていく歩みを進められるように願っています。

[注]

I Tahir, Holiday Pay, (Raptivism, 2000).

2019年7月10日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録